第143回実践勉強会　実施レポート

共催　大田区薬剤師会・中外製薬株式会社

参加者115名

「進行期非小細胞がんの診療の実際」

大森赤十字病院　呼吸器内科　部長

太田智裕先生

＜大田区薬剤師会実践勉強会　質疑応答＞

日時：2022 年 6 月 14 日(火)19:45～21:15
形態：Zoom　Meeting

質疑応答
質問１　ペンブロリズマブ等の KEYNOTE 試験では生存曲線が 2 年を超えたところでプラトーになっているようですが、免疫チェックポイント阻害薬では 2 年生存できればその後の予後も期待できるのでしょうか？
回答１　グラフ上は確かにプラトーになっていますが、5 年生存率等を見ると下がってきていること、また実臨床上でも 2 年超えてからお亡くなりになってしまう方もいるので、一概にそのようには言えないと思います。

質問２　KEYNOTE024 試験で生存曲線が 5 年超えたところで急激に落ちているように見えましたが原因についてご存じでしょうか？
回答２　こちらについてはわかりません。

質問３　1 例目の症例経過の方はかなり治療到達までに難渋されていましたが、薬剤効果としてはどうだったのでしょうか？
回答３　ペンブロリズマブ単剤が非常に良く効いて現在も治療継続されています。

質問４　2 例目の症例経過の方はロルラチニブを使われた際に記憶障害などの副作用が出たと伺いましたが、他の治療を間に挟む、という工夫をされたのは薬剤の休止によって副作用が低減するということなのでしょうか？
回答４　仰る通りで、ロルラチニブの記憶障害などの神経障害の副作用は休薬で改善することがわかっております。間に治療を挟んでいるのは当院独自の非常に特殊なケースだとご理解いただければと思います。